

はじめに

本書は、南シナ海を取り囲むアセアン諸国の金融・資本市場の最新状況について、調査・分析を行った、日本証券経済研究所、第6次アジア資本市場研究会の成果物である。執筆は当研究会のメンバーが、それぞれの研究テーマごとに担当した。

第1章「アジアの金融経済協力」:

中林伸一 アジア開発銀行研究所 総務部長

第2章「ベトナム」:

木原隆司 獨協大学経済学部国際環境経済学科教授

第3章「フィリピン」:

北野陽平 野村資本市場研究所主任研究員（在シンガポール）

第4章「マレーシア」:

安達精司 神田外国語大学外国語学部客員教授

第5章「タイ」:

吉松和彦 日本取引所グループグローバル戦略部課長

第6章「インドネシア」:

広瀬 健 ナウキャスト取締役 CSO

第7章「オーストラリア」:

土屋貴裕 大和総研金融調査部主任研究員

第8章「台湾」:

薛 軍 中国南開大学経済学院教授

上記内容が示すように、本書は2005年7月に設置されたアジア資本市場研究会の研究が一巡した結果を示すものといえる。同研究会は、第1次において、アジア資本市場と日本、をテーマに研究成果を公表し、その後、サブプライム危機とアジア証券市場、躍進目覚ましい中国の金融・資本市場、国際金融セン

ターとの関わり、さらにはまだ発展の緒についたばかりのフロンティア諸国の証券市場への可能性、といったアジア全般の金融・資本市場についての調査・研究を進めてきた。様々な切り口の研究に挑んだアジア市場に関して、再びオーソドクスな観点で分析したことになる。

この間、アジア各国・地域の金融資本市場は文字通り目を見張る発展を示している。とくに、経済規模の拡大と相まって成長する中国の存在感は大きい。当研究会が設置された13年前でも、すでに中国の勃興は予想されていたが、2008年のサブプライム危機時の中国の金融対応が、その後の市場拡張を後押しした。香港、上海の両市場との連結や深圳取引所の発展ぶり、新興市場の勃興、日本以上に進んでいる ICT の活用等々、その証左は枚挙にいとまがない。

アジア各国が、こうした中国の影響を直接、間接に受けていることは間違いない。そうした中で、かつての最先進国である日本も、さまざまな形でアジア地域の金融・資本市場に対する協力と支援を行ってきた。今回取り上げた各国も、日本にとって重要な国々ばかりである。

また、アジア開発銀行（ADB）の役割も非常に大きい。今後の「環南シナ海」金融・資本市場の発展にとって、ADB は引き続き大きな機能を発揮していくものと期待される。

そうした中でも、中国が進める「一帯一路」戦略がこの地域にどのような影響を与えていくか、について目が離せない。本書で検討対象とした各国のほとんどが、中国との領海問題や外交問題を抱えている点も見逃せない。

今後、日本はこれらの国々、地域とどのように向き合っていくべきなのか。本書により、金融・資本市場の分野からの何らかのヒントが抽出できれば、執筆者一同。望外の幸せである。

本書完成に当たっては、上記の各執筆者からの協力はむろんのこと、日本証券経済研究所の安田賢治氏の粘り強いご尽力に大いに助けられた。ここに深甚の感謝を申し上げたい。

また、同研究所理事長の増井喜一郎氏に、陰に日にご支援いただいたことも特筆したい。学恩に九拝するばかりである。

2018年向夏の候

アジア資本市場研究会主査
当研究所理事
大和総研副理事長
川 村 雄 介